

普通科高等学校における進路指導の在り方について

— 現在の取組をどう捉え、生かすか —

総合支援課 高 校 班

実務研修員 川島由夏子

1 はじめに

これまで私が所属した学校では、高校卒業後に進路変更の相談に来校する者が就職・進学問わず見られた。中でも、私が学級担任として関わった生徒が、第一志望校の四年制大学へ進学した数カ月後、他の短期大学への再受験を決心し退学したことは、高校での進路指導の在り方について深く考える契機となった。

総合教育センターでの実務研修を通して学んだことの一つがキャリア教育である。キャリア教育と進路指導は目指すところが本来はほぼ同じでありながら、進路指導がその一部分の進路決定に偏った指導となっていること、それゆえキャリア教育の視点から進路指導を見直す必要があることを知った（注1）。そこで、キャリア教育に先進的な学校の実践を参考に、所属校の進路指導を見直すこととした。

2 所属校の現状と課題

(1) 目標

所属校は、全日制普通科高等学校である。校訓「清く けだかく 美しく」の理念のもと、自立心と社会性を身につけ、高い志を持って行動する、心豊かで社会に貢献できる人間の育成を目指している。「平成 27 年度学校経営計画書」には、次のように指導方針が記されている。

1 (2) 目標具現化の柱

イ 人間力・コミュニケーション力の育成

生徒が自分を律し、将来人の役に立つ、有為な社会人として自立するため、生涯を見通した進路目標を確立させるとともに、ルールを守る人間、思いやりのある人間を育てる。

この具体的な取組として示した中に、進路指導に関する記述があり、所属校の進路指導について「外部の話聞く会」を重視していることがわかる（資料1）。

【資料1】「平成 27 年度学校経営計画書」の一部

	取組目標	達成方法（取組手段）	成果目標	担当部署
イ	人間力・コミュニケーション力の育成	進路ガイダンスの充実を図り、確かな職業観に基づいた進路目標の実現を目指す	各学年、進路ガイダンス等外部の話聞く会開催2回以上	進路課

進路ガイダンスを含め、進路に関する学習は、「総合的な学習の時間」（名称は「道しるべ」である。以下、「道しるべ」とする。）を中心とする「平成 27 年度入学生『総合的な学習の時間』全体計画」では、「育てようとする資質や能力及び態度」を次の通り記し、高校卒業直後

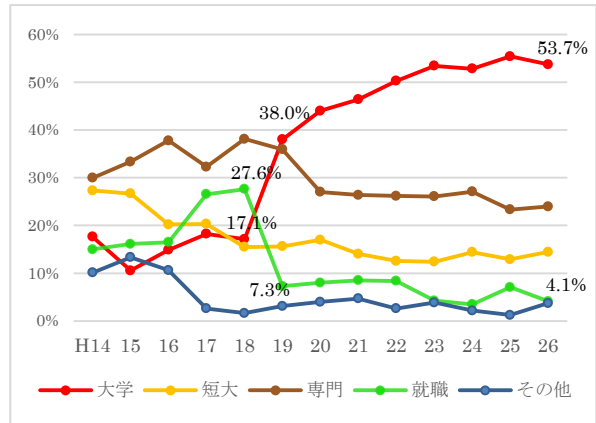
の進路決定と、その先の社会を生き抜く力の育成の双方を目指していることが示されている。

- ・ 自己の将来について具体的に考え、そのための進路目標を設定して、実現を図る。
- ・ 社会について学び、生き抜く力としてコミュニケーション能力の向上を図る。

(2) 内容の変遷

「進路のしおり」によって平成12年度から平成27年度までの進路指導計画を調査した。平成12年度から16年度には、1学年で、進学に向けたプログラムに加え、職業インタビューや職業別講話など直接職業人から学ぶプログラムも実施されている。しかし、男女共学となった平成17年度からは職業に関するプログラムがなくなり、小論文指導を軸に、「分野別ガイダンス」や「合格体験を聞く会」を含む進学に向けたプログラムに変化している。更に平成21年度からは「進路ノート」が導入され、現行プログラムとなった。

【資料2】所属校の進路状況



進路状況を見ると、それまで20%未満であった4年制大学への進学率が、共学1期生が卒業した平成19年には38%に急増している(資料2)。以降も大学進学率は増加し、近年では50%を超える。男女共学化を機に、進路指導の方針転換を図り、上級学校への進学を目指すものに特化していったことがわかる。

「平成27年度入学生『総合的な学習の時間』全体計画」は、1、2学年で「社会について知る」をテーマとした学習が計画されている。1学年では、社会や職業、学問について幅広く学び、それを通して自己の将来の在り方生き方を考える計画になっている。「道しるべ」の具体的な内容を「平成27年度進路指導計画」から分類すると、1学年の内容は、「進路ノート」(ベネッセコーポレーション)、「生きる小論文」(所属校独自教材)の2種類のテキスト教材を用いた学習が中心であることがわかる(資料3)。

【資料3】1学年「道しるべ」の内容

1年	内容	進路ノート	小論文	進路調査	講話	教育相談	コース選択	保育実習
	回数	9	6	6	4	2	1	1

両教材は書き込み式テキストとなっており、生徒は教師の指示に従い、時には配布資料をもとに各自で完成させていく。講話のうち3回は両教材の内容と関連した講話で、講師は教育関連企業や上級学校に依頼している。1回は3年生を講師とした「合格体験を聞く会」である。いずれも学年・学級一斉の形態をとる。

(3) 成果と課題

現行の内容は、学問や上級学校について学ぶものが多く、「進路目標を設定して、実現を図

る」という面では、進路実績等から一定の効果を上げていると言える。学校評価アンケート調査では所属校の進路指導について、肯定が約8割を占め、生徒・保護者の期待におおむね応えられていると言えるであろう。しかし一方で、級友と協同的に学習する機会や、社会人と関わりその価値観や生き方に直接触れる機会は乏しく、「自己の将来を具体的に考える」、「コミュニケーション能力の向上を図る」という部分では課題がある。

近年、これらの課題に対する職員の問題意識が高まり、昨年度から1年次に「進路ノート」の1項目「職業人に話を聞こう」を夏季課題として職業人への聞き取りを行うようになった。しかし、年間行事予定の中で指導のための十分な時間を確保することができず、課題の告知と提出の確認のみとなっている。

3 高校卒業後の現状

所属校では、生徒の高校卒業後の動向について調査を実施していない。そのため、全国的な調査結果から、高校卒業後の現状を確認した。

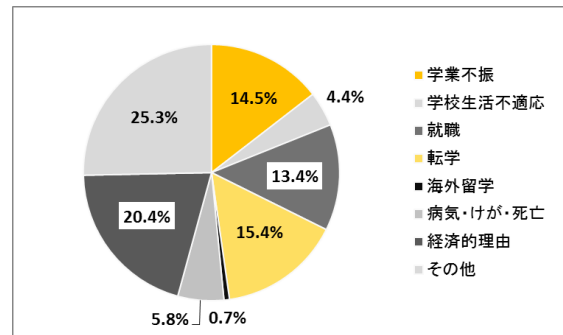
(1) 学生の中途退学

ア 中途退学の理由

文部科学省の調査（注2）によると、平成24年度大学・短期大学・高等専門学校中途退学者は約8万人に上る。全学生数に対する割合は2.65%を占め、前回調査した平成19年度よりも0.24ポイント増加した。

中途退学の理由は、「経済的理由」「転学」「学業不振」の順で高い割合を占め（資料4）、それぞれ平成19年度よりも高い割合となったと指摘されている。

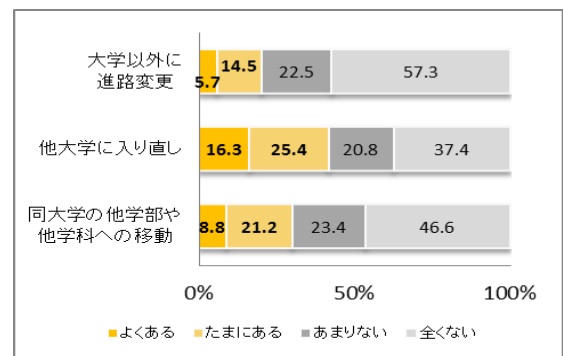
【資料4】中途退学者の状況（平成24年度）



イ 転学

ベネッセ教育総合研究所の調査（注3、以下「ベネッセ総研調査」という。）によると、在籍大学内での学部・学科変更や他大学への転学への希望を抱く学生は少なくない（資料5）。他大学への転学は、一般試験での入学者に多く、現在の在籍する大学に不本意入学し、第一志望校を諦めきれない悔しさがその主な理由となっている。大学内の他学部、他学科への移動希望は、「よくある」「たまにある」を合わせて3割を占める。この理由としては、学びたい内容と大学での学習内容が一致していないことにとどまらず、入学後にやりたいことが明確になったり、変更したりした例も多く見られた。

【資料5】学生の移動希望



同調査によると、受験する大学・学部を決定する際に重視した点として最も比率が高かったのは、「興味のある学問分野があること」、次いで「入試難易度が自分に合っていること」であった。学部系統的にみると、社会科学系統のみ「入試難易度が自分に合っている

こと」が最も高い割合を占めた。また、大学入学時の気持ちとして、「自分の将来の方向を見つけない」に「とてもそう思った」と回答した割合は4割を超え、最も高くなった。どのように生きたいのかという長期的な展望が持てず、高校での学習が入試合格を目的としたものでしかなかったことが、転学希望の多さに繋がっていると推察される。

ウ 学業不振

ベネッセ総研調査では、家庭学習時間についても調査している。大学入試方式別に、高校3年9月の授業以外の主体的な学習時間を見ると、一般試験合格者と指定校推薦・AO入試合格者で「ほとんどしなかった」と答えた割合に大きな差が見られた(資料6)。指定校推薦・AO入試では、学科試験を課さないことも多い。このことが生徒の主体的な学習時間に大きく影響していると思われる。

読売新聞の調査(注4)によると大学入試方式別の退学率は、一般試験6%、指定校推薦9%に対し、AO入試は16%と高い割合を占めた。AO試験については、本来の趣旨・目的に沿わない入学者数確保の手段となっているものもあり、明確な目的を持たない安易な進学や、学生の学力不足が問題となっている。

以上から高校時代に学習習慣が身につけていないことや、進学目的や将来像が曖昧のまま入学することが、大学での学力不振、そして中途退学と関係していると考えられる。

一方、高校3年9月に授業以外の主体的な学習時間が多かった学生についても課題はある。高校3年9月の学校外での学習時間が1日5時間以上であった大学1~4年生の約4分の1は、現在(調査実施は11月上旬)、主体的な学習を全く行っておらず、週当たり

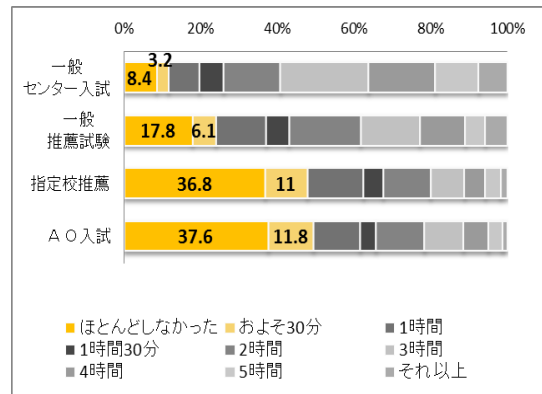
1時間未満と合わせて46.3%を占める(資料7)。また、大学の授業以外の自主的な学習時間は、週当たり1時間未満と回答した割合は、1年34.1%、2年34.8%、3年42.3%、4年60.0%と学年が上がるほど多くなっている。

これらのことから、高校時代に身につけたはずの学習習慣が、必ずしも大学での学習習慣に結びついていないと推察される。また、高校における学習の動機付けが依然として大学入試での合格に偏っており、生徒が学習の意義を見出せていないと考えられる。

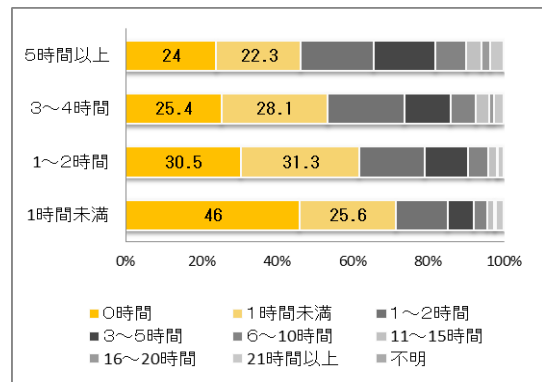
(2) 高等学校で求められる進路指導

八巻甲一(注5)は、キャリアカウンセリングの実践を通して、何を学びたいかではなく、どこの学校に入れるか偏差値や合格可能性で進路選択した人は、就職先の企業選択をする際も同じ基準で選択する傾向があり、こうした基準で進路選択をしてきた人は仕事に躰いたこ

【資料6】高校3年9月の学習時間(1日あたり)



【資料7】大学生の学習時間(週あたり)



とがきっかけで、働く意欲や仕事への自信を失うことは珍しくないと指摘する。また、リクルートワークス研究所のシミュレーション（注6）では、2025年には、産業社会や雇用形態の変化により、働く人の価値観の多様化がさらに進むとされる。必ずしも昇進や高額の給与に高い価値を見出すのではなく、自分なりの価値観を持ちそれに応じた働き方を求めるようになるのである。自分らしい働き方を自ら創り出していく時代では、変化が起きることを前提としたキャリア設計や、自分の希望や価値観をしっかりと伝え交渉する力など、これまで以上に多くの力が要求される。

知識基盤社会の到来や、グローバル化の進展など社会の変化は激しい。高校卒業後に大学等に進学する生徒たちも、いずれは先行き不透明な社会に出ていく。そこでは、幅広い知識・柔軟な思考力に基づいて判断する力や、異なる文化や価値観の人々と協働する力が必要となる。また、社会の変化に漫然と流されず、しなやかに対応していくためには、社会の一員としてどのような役割を果たしていくのか、何に価値を置くのかという、自分の信念や在り方生き方という軸をしっかりと持たなければならない。このような、変化の激しい社会をたくましく生き抜くために必要な能力を育むことが、高等学校教育に強く求められている。

4 キャリア教育先進校の取組

文部科学省「高等学校キャリア教育の手引」には、進路決定手順と基礎的・汎用的能力の関係の一例を載せている。（資料8）。キャリア教育の視点から捉えると、進路決定までの過程を通して生徒が変化の激しい社会を生き抜くのに必要な「基礎的・汎用的能力」を身に付けていけることが理解できる。

キャリア教育先進校の進路指導に関する取組を見ると、大学進学者が大半を占めるいわゆる進学校において

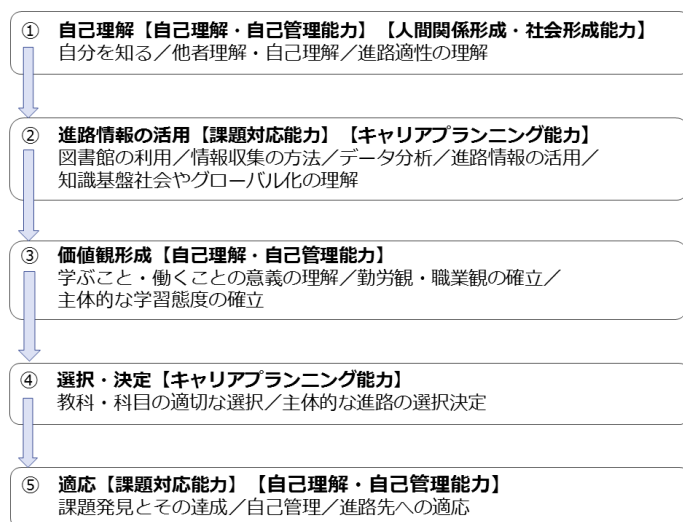
も、インターンシップや職業人講話など、職業教育の充実が図られている。大学等の中退が年間約8万人に上り、大学卒業後3年間の離職率は3割を超える。現在の状況から、高校での進学指導において、生徒が将来における社会参加を視野に入れて、何のために学び続けるのか、何を目指して何を学ぶのかという大学進学の意味を理解させることが求められている。

キャリア教育先進校の取組では、新しいプログラムや独自のプログラムを開発している一方で、従来の取組をキャリア教育の視点によって見直すことでより充実した指導としている事例も多い。確かに時代や生徒の変容に合わせて新しいプログラムを構築していくことも必要である。しかし、従来の取組を活用することで迅速な改善が可能となる。そこで、全国のキャリア教育先進校において、従来の取組をどのように工夫し、充実した指導としているか調査した。

(1) 職業人インタビュー・東京都立芦花高等学校（注7）

全日制単位制普通科。進路状況（平成24年度）は、四年制大学58.4%、短期大学5.6%、

【資料8】進路決定手順と基礎的・汎用的能力



専門学校 24.9%、就職 1.7%、進学準備 7.7%、その他 1.7%。

「総合的な学習の時間」に、人間としての在り方生き方や自己の進路についての学習を実施している。1学年で行う「職業人インタビュー」では、1学期後半に自分の興味のある職業に就いている人を見つけ、自らアポイントメントをとり、夏休みに仕事への思いやこだわりを取材する。2学期には、インタビューの成果として「職業に対して発見したこと」や、「働くことに関するイメージの変化」などをワークシートにまとめる。個人作業であるが、グループ内でアドバイスし合いながら進める。クラス内でのプレゼンテーションの後、グループで「働くとは」をテーマに話し合いを行い、最後にクラスで共有する。

(2) 職業人講話・佐賀県立佐賀西高等学校（注8）

全日制普通科。進学状況（平成26年度）は、四年制大学 83.8%、専門学校 0.3%、進学準備 15.8%。

「総合的な学習の時間」で小論文を軸とした進路指導を行う。1学年では、小論文指導の中に職業研究・学問研究を位置付ける。

職業研究では、まず各自で決めた職業について調べ学習とレポート作成を行い、職業について理解・知識を深める。次の「職業人の話を聞こう」では文系理系から一コマずつ希望する講師の話を聞く。講師は主に同窓生に依頼する。各講座の生徒数は7～8人で、責任者、司会、記録、質問係など7つの係を分担し、生徒が会の運営を行う。夏休みには、調べ学習や職業講話を踏まえ、各自が選択した職業について「最終報告書」を提出する。9月には「職業研究」の総仕上げとして小論文テスト（テーマ『私の目指す仕事』、800字）を実施する。

2校の他にもキャリア教育先進校の取組について調査し、大学進学者が大半を占める、いわゆる進学校であっても、職業人インタビューや講話など、職業教育を重視していることを知った。職業人インタビューや講話は、従来から他校でも行われているものである。所属校でも昨年度から職業人インタビューを実施している。しかし、取組を具体的に見ると、これまでとはねらいが異なることがわかった。これまでは、仕事内容を具体的に知り、将来就きたい職業を明確にすることが主な目的であった。それに対しキャリア教育先進校では、働く意義の理解や、多様な価値観に触れ、将来の自分の在り方を考えた上で、進学の意義を考えることを目的としている。

講話は、ともすれば生徒が受身になりやすいものである。キャリア教育先進校では、他の学習との関連性を高めた計画を立てており、今回の取組がどのような意味を持ち、今後の学習にどのように結びついていくのか生徒が実感できるようになっている。また、少人数グループの活動や係分担など、生徒個々が活躍する場面を設定している。これらによって、生徒の学習意欲を高めることに繋がると考える。さらに事前・事後活動として、話し合いや発表といった言語活動に時間を取っている学校も多い。言語活動を通して、得た情報を整理するだけでなく、情報を自分のものとし、考えを深めることになる。そして、自分の考えを表現し、伝え合うことで、コミュニケーション能力の育成も期待できる。

以上から、所属校の進路指導の課題に対しては、まず現在の取組について、目的の明確化や、言語活動の実施により、迅速な改善を図ることができると考える。しかし、現行の内容では、直接職業人から、社会で必要な力を知ったり、多様な価値観や生き方を実感したりする場面が不足しているため、これらを可能とする新たな取組を検討する必要がある。

5 所属校における実践「分野別ガイダンス」での検証

改善の手掛かりとして、「分野別ガイダンス」で言語活動を行うことを考えた。今年度については既に年間計画で内容が定められているが、言語活動ならばその中に取り入れることが可能であると考えたためである。また、先に述べた通り所属校では「外部の話聞く会」を重視している。実際のところ「道しるべ」では、「学校経営計画書」に示された目標よりも多くの回数が設定されており、汎用性があると考えたからである。

(1) 実施内容

「分野別ガイダンス」は1、2学年合同で実施している。上級学校の教職員等を講師とし、生徒は事前の希望調査によって振り分けられた2分野の模擬授業に参加する。今年度は、15大学から講師を招き行われた（資料9）。

「分野別ガイダンス」は、これまでは、模擬授業に参加し、その後要点をワークシートに記入して終えていた。今回、1学年部の協力を得て資料10を計画し、実施した。

【資料9】模擬授業一覧

	系統	講師
1	文学・歴史	武蔵野大学
2	外国語・国際関係	多摩大学
3	経済・経営	富山大学
4	法学・社会学	立正大学
5	心理・福祉	淑徳大学
6	理学	東京電機大学
7	工学	群馬大学
8	教育	文教大学
9	保育・幼児教育	静岡福祉大学 田園調布学園大学
10	家政学	岐阜女子大学
11	体育・スポーツ	国際武道大学
12	美術・デザイン	名古屋芸術大学
13	看護	聖隷クリスティアン大学
14	リハビリテーション	国際医療福祉大学

【資料10】「分野別ガイダンス」単元計画

〈現行〉

	主な活動内容	形態
朝 S H R (5分)	行動の確認 ・場所、持ち物を確認する	一斉 (HR)
6 分 × 2 限 目	模擬授業 ・参加した模擬授業の内容をワークシートに記録する	一斉 (分野)



〈実施計画〉

日時	主な活動内容	形態
9 / 28 朝 S H R (5分)	目的の明確化 ・教師が分野別ガイダンスの趣旨と流れ、報告会について説明する	一斉 (HR)
6 分 × 2 限 目	模擬授業 ・参加した模擬授業の内容をワークシートに記録する	一斉 (分野)
9 / 29 (朝の時間 10分)	情報の整理と共有（報告会） ・参加した授業2つのうち、1つを選択し、1人1分で報告する 振り返り ・リフレクションシートに記入し、自己の取り組みと成果を確認する	グループ 個人

実施計画では、言語活動として「報告会」を設け、模擬授業後、各グループで自分が参加した模擬授業について口頭で報告することとした。また、成果を確認するために、リフレクションシートを作成した。11～15HRを対象とし、報告会を除く部分を共通して行い、11HRのみ報告会を行った。

(2) リフレクションシートの結果

ア 模擬授業

報告会の効果を確認するため、報告会実施クラス（11HR）と未実施クラス（12～15HR）のリフレクションシートを比較した（参考資料参照）。その結果、「②大事だと思うことをメモすることができましたか」「③模擬授業の内容を理解することができましたか」について、報告会を実施した11HRでは「よくできた」と高く評価する傾向が見られた（Fisher's exact test、両側検定、 $p < .10$ ）。

11HR生徒には、報告会に関する質問を追加し、報告会があったことでこれまでと講義の聞き方にどのような違いがあったかを聞いた。その結果39名中14名が、「講義中伝えることを意識して集中して聞いた」と回答した。そのうち2名が、「伝えることを意識して聞いた結果、その分野のことをより詳しく知ることができた」と回答している。リフレクションシートの結果は報告会の効果を立証するには不十分ではあるが、報告会の設定によって、メモを取る、しっかり聞くと言った態度だけでなく、模擬授業の内容を理解しようとする意識が働いたと推測できる。

イ 報告会

リフレクションシートには、11HRのみ報告会に関する項目も設定した。4項目のうち、他者の報告への自分の聞き方に対しては高い評価となった。その他については「よくできた」よりも「できた」とする割合が高く、模擬授業ほど自己評価が高くはならなかった。これは、講話の事後活動として、報告会のような言語活動を取り入れたことが初めてであったためだと思われる。

情報を伝えるために必要だと思うことを聞いたところ、「他人に報告するためには本人が情報をきちんと理解することが必要である」、「具体例や自分の感想を入れながら話すと伝えやすい」など生徒が自分の取組に対する改善点を具体的に挙げているものが見られた。このような気づきから生徒が試行錯誤して解決策を探り、そこから次の課題を発見することの繰り返し学習意欲、更には自己肯定感を高めることになると考える。同様の場面を繰り返し経験することで、次第に聞き方、話し方というコミュニケーションの基本を身に付けたり、情報を的確に処理し、自分の在り方生き方に繋げて考えられるようになるのではないかと、その手段としての言語活動の有効性を感じた。

(3) 今後に向けて

産業・経済の構造的変化や雇用の多様化・流動化が進む中、異なる価値観を持つ人々と協働するためには、自分の考えを明確に持ち、それを伝えていく言語能力がより一層求められる。「高等学校学習指導要領」の総則には、各教科等において思考力、判断力、表現力を育成する観点から、言語環境を整え、言語活動の充実を図ることに配慮することが求められており、「総合的な学習の時間」も例外ではない。今後、所属校で言語活動を充実させるためには、教師の意識の転換と、他の学習活動との関連性を高めることが必要だと考える。

所属校では、積極的にグループ活動等を行っている教師がいる一方で、「本校の生徒には無理だ」と教師が生徒の限界を設定し、生徒が円滑に活動できないことを失敗と恐れ、活動させることを避ける傾向もある。総合教育センターの研修を通して、小中学校で多くの言語活動や体験学習に取り組んでいることを知った。今回の実践では、生き生きと取り組む生徒の姿に、これまでの学習で育まれた生徒の力を実感することができた。今後は「無理だ」ではなく、小中学校での学習を前提とし、留意点として取り組めない生徒やグループに対して教師がどう働き掛けるかを検討して計画するべきである。生徒の力を伸ばすためには、教師の意識の転換が不可欠である。

また、現行の学習の中にただ言語活動を設定するのではなく、学習したことや身に付けたこと、できなかったことや課題を生かし、生徒が試行錯誤しながら解決し、力をつけていけるよう、他の学習活動との関連性を高めることが必要である。学習内容はもちろん、言語活動についても、他の学習活動との関連性を高めることで、生徒の学習意欲と言語能力の向上を図ることができると考える。

6 所属校の進路指導の充実に向けて

更にキャリア教育先進校の取組を調査し、所属校の進路指導の充実に向け、次の(1)～(3)の必要性を強く感じた。

(1) 学習の関連性を高めた計画

社会や仕事に直接触れる学習として所属校が行っているものに職業人インタビュー「職業人に話を聞こう」がある。職業人インタビューは、将来の展望を持ったうえで高校卒業後の進路選択を行うために有効な取組であると考えられる。しかし現状は、話を聞き、ワークシートに感想や内容を記入するだけの単発的な行事となっており、十分な成果を得られていない。これは、取組の目的が明確にされていないことと、前後の進路学習との関連性が薄いためである。このような単発イベント化の現状と課題は、他の進路行事にも共通する。

「職業人に話を聞こう」は、仕事研究（進路ノート）に約2ヵ月遅れて計画され、内容の繋がりが明確にされていない。また2学期は学問研究が中心となり、職業人インタビューの成果を活用する場面が設定されていない。今回の取組がどのような意味を持ち、今後の学習にどのように結びついていくのが実感できれば、生徒の学習意欲の向上に繋がる。そのためには系統的な計画が必要である。

(2) 目標と評価

国立教育政策研究所は、目標の明示と振り返り、話し合いや発表などの活動と学習意欲との関係を指摘している。(注9)。教師が生徒の実態を把握したうえで意欲を高める工夫・指導を行うと同時に、生徒自身が何を目標に学ぶのかを理解したうえで学習に臨み、目標とした力がどのくらい付いたのか確認することで学習意欲向上と学習内容の定着が期待される。高校班の実務の一つとして行った「平成27年度学習状況等に関する調査」(対象は静岡県内の県立高校1年生全員と各校2年生1学級)では、授業内容が理解できると感じるよりも、授業で力がついたらと実感できることの方が学力の向上との関連性がより強いと思われる結果が見られた。

では、進路指導において生徒に学習の成果や自己の成長を実感させるには、どのようなこ

とが考えられるのか。その実践例の一つとして秋田県立由利高等学校を取り上げる。

秋田県立由利高等学校（注 10）

全日制普通科、理数科、国際科。進路状況（平成 26 年度）は、四年制大学 45.1%、短期大学 13.6%、専門学校 25.0%、就職 14.1%、その他 2.2%。

秋田県立由利高等学校は、「キャリア教育 Can-Do リスト」と「由利高校版キャリアノート」を独自開発し、3年間を見通した計画的なキャリア教育に取り組んでいる。その中心として「総合的な学習の時間」を位置付ける。「Can-Do リスト」は生徒に身に付けさせたい力をリストアップしたものである。また「Can-Do リスト」の達成度チェックを9月と12月に実施し、生徒が自身の成長を評価するとともに、教師の指導改善に活用する。一方「キャリアノート」は、3年間のキャリア教育の内容を1冊にまとめたものである。高校3年間で身に付けさせたい能力や、各学年の取組内容とそこで身に付けさせたい能力が具体的に示され、「Can-Do リスト」や3年間の総合的な学習の時間等で使用する全てのシートを含んでいる。

学習で使用した全ての記録が学習順に1冊にまとまっていれば学習内容の振り返りだけでなく、自分がこれまでの学習を通じてどのような力がついたのか常に一覧することができる。つまりポートフォリオとなる。「Can-Do リスト」のようなチェックリストは、年度当初や途中で実施すれば、生徒が自分自身の状態を把握するだけでなく、目標の確認・理解という点でも有効であると考えられる。

(3) 地域との連携

中央教育審議会（注 11）は、学校と地域の連携について次のように述べ、より一層強い連携を求めている。

「子供たちが生きる力は、学校だけで育まれるものではなく、家庭における教育はもちろんのこと、多様な人々と関わり、様々な経験を重ねていく中で育まれるものであり、地域社会とのつながりや信頼できる大人との多くの関わりを通して心豊かにたくましく成長していく。地域住民や企業、NPOなど様々な専門知識・能力を持った地域人材が関わることで、将来を生き抜く子供たちに、実社会に裏打ちされた幅広い知識・能力を育成することができる。」

進路指導に関しては、これまでインターンシップや職場見学等において地域人材の協力を得てきた。これらは、一つの職業について具体的に知ることを目的として実施されることが多い。確かに進路選択において具体的な内容を知ることが重要である。しかし同時に、自分なりの価値観を見出し、将来設計をしていくためには、職種に囚われず多くの価値観や生き方に触れることも必要であり、その機会も考えていかなければならない。

所属校では、ボランティア活動を推進しており、「学校経営計画書」にも成果目標として「一部活動、一ボランティア」、「ボランティア参加生徒数延べ100人以上」と明記している。音楽系の部活動では、学校近隣の福祉施設等で演奏会を開催するなどボランティア活動を通し、

地域と関わりを深めている。また、PTA奉仕作業への部活単位の参加や、地域防災訓練への参加など、生徒と保護者や地域との関わりを促進している。これらの活動では、日常生活では関わることのない地域住民と関わり、職業人が仕事や家庭以外の場においても様々な役割を果たす姿を目にすることになる。現在行っている取組も捉え方によって、生徒に地域での職業人としての役割を学ばせる機会とも、多様な価値観に触れる機会ともなり得る。教員が、地域との関わりが生徒そして教員自身にとってどのように意義あるものなのかを理解し、既存の取組を発展させることでより充実した活動となると考える。

(4) 1学年「道しるべ」年間計画の検討

所属校では、進学指導を中心とした進路指導がなされてきた。将来就きたい仕事を決め、それに適した学部学科を選び、偏差値や諸条件に合った上級学校を選択するといういわば志望校決定に向けた指導に偏重する傾向があった。しかし、所属校には就職希望者も少数ではあるが存在する。そもそも進路指導は、進学と就職のいずれかに特化したものではなく、卒業後の社会生活への適応や更なる成長のために必要な能力や態度の育成を図るものである。社会の変化に漫然と流されず、力強く自分の生活や人生を築いていくために、自分の信念や自己の在り方生き方という軸をしっかりと持たなければならない。それゆえ、受験する学校・会社を決めるために、職業を絞っていくような学習ではなく、生徒が能動的に多様な価値観や生き方に触れる学習が必要である。

以上の視点から、(1)～(3)を踏まえ、1学年「道しるべ」の見直しを図った(資料11)。現行では、「道しるべ」の年間計画は、「進路のしおり」(生徒・教師)と「道しるべ実施計画書」(教師)に示されている。しかし、教師に配布される単元計画には目的等が記されているが、年間計画については「道しるべ実施計画書」に学年目標が記されているのみである。そこで、目的を明確にし、学習の関連性を理解しやすくするために、ねらいと各単元の留意点を記した。

ア 社会・職業に関する学習

「職業研究」「職業人インタビュー」「自分史」は、「進路ノート」にある項目である。資料11では、これらを共通のねらいのもとに計画し直した。また、上級学校職員を講師とする「分野別ガイダンス」は、2学年でも実施しているため、1学年では、社会人を講師とし、社会・職業に関する学習として検討した。

実際にこの計画を行う場合には、これまでとはねらいが異なるため、講師の選定やインタビュー相手の選定基準、さらには講話内容などを変える必要がある。生徒が希望する職種という基準ではなく、どのような経験や信念を持っているのかという点で講師を選定し、仕事内容よりもこれまで担ってきた役割やそれを通して養われた考え方などを聞けるようにしなければならない。これらを可能とするには、地域の人材に関する情報を得られたり、講師を依頼したりできるような関係を、6(3)で述べた連携を通して築くことが重要となる。

また、この計画には、社会に触れるという点が不足しているが、まずはこれまで学校として参加を推進してきたボランティア活動や地域の活動を、進路指導と同じねらいの下に位置付け、関連性を高めることで、生徒と社会を繋げる機会とすることを考えた。

【資料 11】1 学年「道しるべ」案

ねらい	「道しるべ」の内容			関連行事
本校での進路指導の目的と年間計画を知る	チェックリスト	<ul style="list-style-type: none"> 自己の力を把握する 目標を理解する 	個人	
社会の中で世代により様々な役割を担っていること、その役割を果たしながら自分なりの価値観を形成していることを理解する	職業研究 (進路ノート)	<ul style="list-style-type: none"> 興味のある職業について理解する 	個人	<ul style="list-style-type: none"> 外部団体主催のボランティアや職業体験 P T A 奉仕作業 保育体験 地域防災訓練
	職業人に話を聞こう① (座談会)	<ul style="list-style-type: none"> 保護者や卒業生から仕事や家庭、地域での役割やそれに対する考えを聞く 報告会で情報を共有する 	グループ	
	職業人に話を聞こう② (インタビュー)	<ul style="list-style-type: none"> 座談会とは異なる世代の職業人に、仕事や家庭、地域での役割やそれに対する考えを聞く グループで総括し、様々な世代の役割を考える 	個人 グループ	
	・自分史(年表)を作ろう	<ul style="list-style-type: none"> 職業人の話を参考に、自分の将来について具体的なイメージを持つ 	個人	
情報を適切に活用し、進路実現に向けた見通しを立てるとともに、学ぶことの意義を理解する	学問研究 (進路ノート、進路適性検査、夢ナビプログラム)	<ul style="list-style-type: none"> 学問分野、上級学校について理解する 	個人	<ul style="list-style-type: none"> 学校説明会
	合格体験を聞こう	<ul style="list-style-type: none"> 進路決定した3年生から体験談を聞く グループで総括し、進路決定に重要なことは何か考える 	個人 グループ	
	小論文入門 (生きる小論文)	<ul style="list-style-type: none"> 自分の将来について考えを深める 	個人 グループ	
1 年間の取組の成果を確認する	チェックリスト	<ul style="list-style-type: none"> 目標を確認する 自分の成長を確認する 	個人	

イ 学問に関する学習

前述のように、所属校の進路指導の中心は進学指導である。例えば、1学年3学期と3学年1学期に実施している「合格体験を聞く会」は、進路が決定した3年生や大学に進学した卒業生から大学合格までの体験談を聞くものである。所属校では、9割の生徒が進学を希望するが、就職希望者も少数ではあるが存在する。就職希望者が、志望校決定に向けた指導としての学問研究や先輩の合格体験談を聞くことにどのような意味を見出せるだろうか。現在の計画では難しいが、これらもねらいを変えて見直すことで、どの進路であっても社会人としての力を養う学習とすることが可能となると考える。

資料11では、それぞれ単独で行っていた取組を、学ぶことの意義を理解することをねらいとした学習としてまとめ、「合格体験を聞く会」はその一つとして位置付けた。そして、体験談を話す生徒を、大学進学者に限定せず、就職者などからも選び、様々な進路から進路決定に重要なことは何か考える機会とすることとする。進路について異なる視点から話を聞くことで、より広い視野や多様な視点から進路を考えることに繋がると思われる。

7 終わりに

本研究を通して、変化の激しい社会を生き抜くために必要な能力の育成を図ることが進路指導の充実につながることを理解した。今後、普通科高校における進路指導は、学校という限られた場だけでなく、地域社会と連携した様々な活動を通して、自己の在り方生き方という軸を作り、その中で高校卒業時の進路を考えさせたり、コミュニケーション能力や自己管理能力などを生徒に身に付けさせる指導へと変わらなければならないと考える。しかしそれらの力は、進路指導のみならず、教科横断的・総合的に育成すべきものである。所属校では今年度、「目的指向型学校経営重点事業枠」に採用され、学校全体で授業改善に取り組んできた。学校における教育活動全体で上記のような力を育むためには、生徒に身に付けさせたい力を全教職員で焦点化し、共有することが不可欠である。そのうえで、教師個々が常に意義やねらいを意識して教育活動に臨むことが求められる。

この1年間は、これまでの自分の不勉強さと学び続けることの大切さを実感する日々であった。多岐にわたる講義・講演を聴講し、教育に関する最新の研究や今後の方向性を学んだ。高校班の実務からは、主に進路関係の調査集計を行い、全国的な高校生の傾向や、本県高校生の特徴を知ることができた。これらによって、広い視野で教育を考えること、所属校の教育活動や自己の取組をじっくり振り返ることができたことは、今後私にとって大きな糧となるだろう。

聴講した研修の中で、何度か「ミドルリーダー」という言葉を聞き、私たちの世代が学校という組織の中でどのような役割を担っているのか学んだ。これまで私は、教師として生徒のために何ができるのかという教師としての役割を追求するのみで、組織の一員として担う役割は意識していなかった。今後は、教師・組織の一員としての役割を自覚し、その責任を果たすことで、この1年の研修の成果を還元していきたい。

注

- 1) 文部科学省『高等学校キャリア教育の手引き』、2011年
- 2) 文部科学省『学生の中途退学や休学等の状況について』、2014年

- 3) ベネッセ教育総合研究所『第2回大学生の学習・生活実態調査報告書』、2012年
- 4) 読売新聞「大学の實力 教育力向上の取り組み 上」、2014年7月9日
- 5) 雇用問題研究会『職業研究2015冬季号』、2015年
- 6) リクルートホールディングス『Career Guidance Vol.407』、2015年
- 7) リクルートホールディングス『Career Guidance No.42』、2012年
- 8) Gakken『学研・進学情報 2015.8』、2015年
- 9) 文部科学省国立教育政策研究所『平成25年度学力・学習調査報告書クロス集計』、2013年
- 10) リクルートホールディングス『Career Guidance Vol.406』、2015年
- 11) 中央教育審議会『新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について（答申）』、2015年

参考文献

- ・ 児美川孝一郎『キャリア教育のウソ』、ちくまプリマー新書、2013年
- ・ 鈴木達哉『進学校のキャリア教育』、学事出版、2011年
- ・ 藤田晃之『キャリア教育基礎論』、実業之日本社、2014年
- ・ 文部科学省
 - 『今、求められる力を高める総合的な学習の時間の展開』、2013年
 - 『言語活動の充実に関する指導事例集【高等学校版】』、2014年
- ・ 文部科学省国立教育政策研究所
 - 『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第一次報告書』、2013年
 - 『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態調査第二次報告書』、2013年
- ・ 中央教育審議会
 - 『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』、2011年

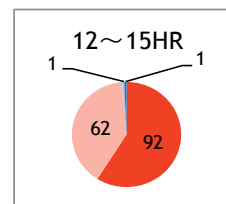
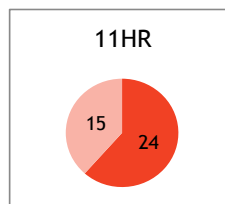
参考資料 「分野別ガイダンス」リフレクションシート集計結果

1 模擬授業について

【全HR共通】

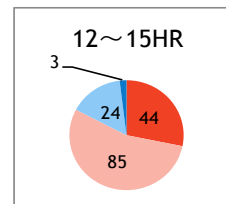
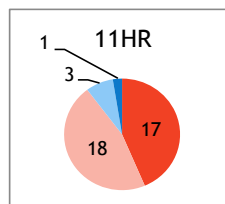
①講師の話をしっかりと聴くことができましたか

	よくできた		できた		あまりできなかった		できなかった		合計
11	24	61.5%	15	38.5%	0	0.0%	0	0.0%	39人
12~15	92	59.0%	62	39.7%	1	0.6%	1	0.6%	156人



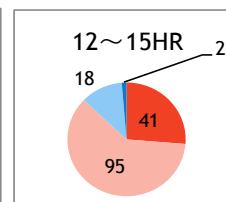
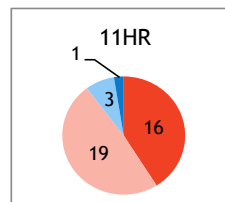
②大事だと思うことをメモすることができましたか

	よくできた		できた		あまりできなかった		できなかった		合計
11	17	43.6%	18	46.2%	3	7.7%	1	2.6%	39人
12~15	44	28.2%	85	54.5%	24	15.4%	3	1.9%	156人



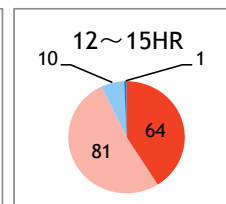
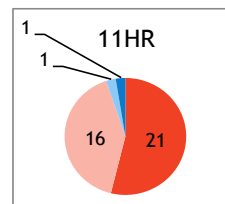
③模擬授業の内容を理解することができましたか

	よくできた		できた		あまりできなかった		できなかった		合計
11	16	41.0%	19	48.7%	3	7.7%	1	2.6%	39人
12~15	41	26.3%	95	60.9%	18	11.5%	2	1.3%	156人



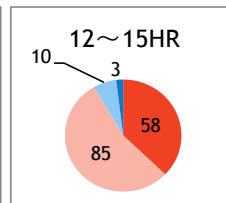
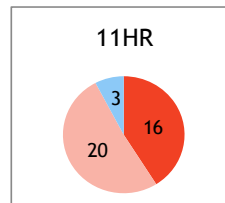
④参加した分野への興味を深めることができましたか

	よくできた		できた		あまりできなかった		できなかった		合計
11	21	53.8%	16	41.0%	1	2.6%	1	2.6%	39人
12~15	64	41.0%	81	51.9%	10	6.4%	1	0.6%	156人



⑤自分の進路を考える材料にすることができましたか

	よくできた		できた		あまりできなかった		できなかった		合計
11	16	41.0%	20	51.3%	3	7.7%	0	0.0%	39人
12~15	58	37.2%	85	54.5%	10	6.4%	3	1.9%	156人



【11HRのみ】

これまでの報告会がない場合と比べ、今回の報告会がある場合では講師の話を聞くとときに違いはありましたか？
どんな違いがありましたか？

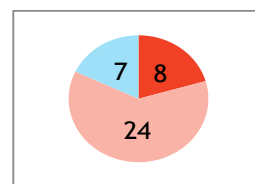
- ・伝えることを意識し、集中して聞いた（14人）
「人に話さなければならぬから、話の内容の大事な部分を意識して聞くようにした。」
- ・しっかりメモを取った（8人）
「重要だと思ったことはしっかりメモをした。」
- ・参加した分野への理解が深まった（2人）
「その分野に対する理解が深まりました。」

2 報告会について

【11HRのみ】

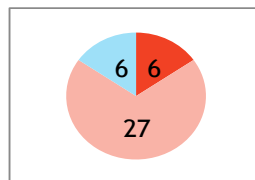
①人に伝えようとする中で、模擬授業の内容を整理することができましたか

よくできた		できた		あまりできなかった		できなかった		合計
8	20.5%	24	61.5%	7	17.9%	0	0.0%	39人



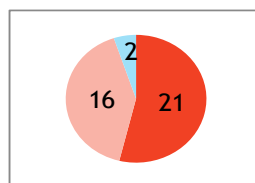
②他の人に伝えようとしたことを、伝えることができましたか

よくできた		できた		あまりできなかった		できなかった		合計
6	15.4%	27	69.2%	6	15.4%	0	0.0%	39人



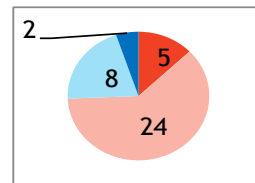
③他の人の報告をしっかりと聴くことができましたか

よくできた		できた		あまりできなかった		できなかった		合計
21	53.8%	16	41.0%	2	5.1%	0	0.0%	39人



④他の人の報告を聴いて、自分の進路をより考えることができましたか

よくできた		できた		あまりできなかった		できなかった		合計
5	12.8%	24	61.5%	8	20.5%	2	5.1%	39人



今後、情報をを他の人に伝えるために、どのようなことが必要だと思いますか？

・事前に情報をまとめる（19人）

「要点をまとめて説明する。」

「聞いた情報をまとめてしっかり整理して聞き手に聞きやすいようにした方がよいと思いました。」

・話す工夫（11人）

「大学の先生たちは例えをもってわかりやすく説明していたので、自分たちも例えがあると思う。」

「情報だけでなく、自分の感想をはさむと伝えやすくなるし、相手も理解しやすくなると思った。」

・情報を自分自身が理解する（7人）

「伝えたい情報をしっかりと理解しておくこと。」

「自分で情報を選び、いる情報いらない情報を分けて、必要なものだけを伝える。」

「もっと深くいろんなことを知る。」

・聞く工夫（3人）

「重要なことは単語だけでもメモをとっておくこと。」

「メモを取ることと、聞くことの両立をできるようにすること。」